

## 異文化としての哲学的倫理学

伊勢田哲治

1

## 背景

- 『倫理的に考える』という倫理学理論の専門書を昨年末に出版したところ、熊澤さんより何を書いてあるか教える、というリクエストがあった。
- この本の内容をそのまま紹介するのも一応可能ではあるが、おそらく倫理学者ならざる方たちにはそもそもなんでそんなことを論じているのか分からない、ということも多いに違うと思う。

2

## 背景(2)

- そこで、以下では、**哲学的倫理学という学術分野が何を課題としてきたのか、何をやる学問として発達してきたのか**、ということは何となく伝えよう、という視点から、著書の解題を行いたい。
- ここでいう「哲学的倫理学」は、19世紀末~20世紀初頭を起点とする英米の分析系の倫理学を指す。「倫理学」という言葉はさまざまところで使われるし、哲学と関係のない領域も多いが、以下ではこの系統のことを単に「倫理学」と呼ぶ。

3

## 背景(3)

- 哲学(この意味での倫理学も含めて)と異分野の交流、連携、融合のあり方はほんとうにいろいろありうる。「応用倫理」の諸分野では積極的に役に立とうと問題設定をおこなったりしている。
- ただ、そうした交流の一つのあり方として、**「なんだか変な異文化として哲学と接触する」ということ自体が役に立つ面もあるのではないかと考えている**。哲学者があまり物分かりがいいと、そういう役割が果たせなくなる可能性も。

4

## 『倫理的に考える』

- 過去に書いた論文の中から倫理学理論に関するものを中心にあつめた論文集。完全な書きおろしも1本収録。
- 過去の論文も大なり小なり手を入れている(特に大学院生時代に書いたものは...)



5

## 警告

- この本は受付で数冊著者割引販売していますが、こういう場で販売するのは詐欺といってもよいくらい**完全に専門家向けの本**です。
- でもその注意を理解した上で興味を持って読んでいただけるのは歓迎です。

6

## 全体の構成

- 第一部「倫理的理論」
  - ある意味一番抽象的な倫理学の内部の論争に関わるものをつめています。
- 第二部「倫理学の自然化と社会化」
  - 「倫理学の自然化」は倫理学と科学哲学の共有する話題でもあり、道徳心理学や進化心理学など他の分野の人の参入もあって活発な分野です。ここではその分野における論文をあつめています。
- 第三部「倫理的思考の広がり」
  - どちらかといえば応用倫理的な論文を集めていますが、一般に考える応用倫理学とはちよつと違うものをわざとあつめています。

7

## 第一章 広い往復均衡と多元主義的基礎付け主義

- 初心者お断りなオーラを第一章のタイトルからして醸しだしています(わざとです)。
- 実験や観察をベースに議論のできる他の科学と違って、哲学にはそうしたものが証拠にならないような話題が多々あります。特に、規範とか善とか、それ自体なんだかよくわからないものについて論じる倫理学はなおさらです。
- 他方、英米系倫理学の伝統として、議論は議論としてきちんとしていなくてはいけない(たんなる自分の主観のたれながしではいけない)というしほりもあります。
- この、「正体すらよくわからない、データで論じられない対象について筋道だった議論をするにはどうしたらいいか」というのが倫理学の方法論と呼ばれる分野で、この章その話をしています。

8

## Ill formed question?

- 方法論でこんな苦勞をするのはそもそも問題の立て方が悪いのだという人もいられるかもしれません。
- 哲学の世界でも、問題の立て方が変わって急にいろいろな議論ができるようになったという例は多々あります。
- しかし、「それは俺たちが解きたかった問題ではない」という反応をせざる場合もあります。

9

## Ill formed question?

- 倫理についていえば、心理現象や社会現象としての倫理ではなく、「我々自身が従うべきものとしての規範」「我々が尊重すべきものとしての価値」というものに興味がある、というのが中心のポイントだと思います。
- そうした一人称的な問題設定においては、「みんながどうしているか」は参考にはなるけれども決定的なデータにはならない。手がかりは我々の中から見つけないといけない。

10

## 第二章 外在主義的メタ倫理学は行為の指針を与えるか

- この章は「外在主義」対「内在主義」という、外部の方には大変理解しにくい論争をあつかっています。
- 英米系倫理学は言葉とか概念の分析とかに非常にこだわるという文化を持っています。
- 道徳についても、「概念」のレベルに属するのがどこまでか、心理的プロセスのレベルに属するのがどこまでか、といった興味の持ち方をするわけです。その中での議論ということになります。

11

## 第四章 未確定領域功利主義

- 功利主義(幸福を最大化するべきであるという規範理論)をめぐる議論をしています。
- 功利主義に対する批判には「直観に反する」というものが多いので、「直観」で決まらないときだけ功利主義を使いましょう、ということを主張しています。
- 「直観」がさまざまところで科学における「データ」のような役割を果たすのも哲学の(これは20世紀の分析哲学全般の)特徴。

12

## 功利主義という理論

- 功利主義についてもう少し補足
  - 「**最大多数の最大幸福**」を目指す、というのをあらゆる規範の根拠にある第一原理だと考える。
  - 「幸福」の定義はいろいろありうるが、現在の主流は、**ある種の条件を満たす欲求が充足されること**だと考える。
  - **現在の功利主義は人々が「幸福の最大化」を意識的に目指すことを求めない。**むしろ日常的には幸福や利益を無視して行動することが幸福を最大化する可能性がある。

13

## 第五章普遍化可能性は進化論的に説明できるか

- 進化心理学などでの利他行動の研究はなんだか倫理学者が興味をもってきた問題と違いそうだ
  - 倫理学者の議論の一つのテーマとなってきたのが、**倫理というものが持つとされるある種の普遍性や客観性と、倫理というものの持つ動機付けの力との関係。**
- じゃあ倫理学者が興味をもってきた意味での倫理についてはどう進化論的議論ができるだろうか、というのがこの章のテーマ
- ただし、実際には進化論とのつなぎとして使う認知的不協和理論との関係の方がこの章のメイン。

14

## 第六章道徳的人格を演じること

- この章も「内在主義」対「外在主義」の論争をあつかっているが、どちらかという、倫理的な議論で出てくる「動機」とか「欲求」とかというものと心理的なカテゴリーとしての動機とか欲求とかをあまり同一視してはいけないのではないか、という問題意識で書かれています。
- その際、「役割理論」という社会学系の理論を援用するというのがこの章の特徴です。

15

## 合理的な議論としての倫理

- 第五章や第六章は、同じ「倫理」や「道徳」をテーマにしても、倫理学者と心理学者など他の分野の研究者とで根本的に想定している対象が違うのではないかと、という問題意識にたっています。
- 倫理学者が(少なくとも1970年代ごろまでは)問題にしてきたのは、**合理的に議論する営みとしての倫理**であり、だからこそ言語的な側面に関心が集中してきたし、倫理的な判断の普遍性や客観性の根拠というものが問題の中心になってきた。

16

## 第八章倫理学理論は環境科学に貢献できるか

- 環境科学はそれ自体は科学的な研究領域だが、生態系の保護や有害物質の規制などの社会的な要請と研究課題が直結するという意味で、他の理学的な分野とくらべると社会的価値というものが身近だと思われます。
- では倫理学はそういう分野にどう貢献できるのか。今回の話題提供の趣旨とも近い章なので、ちょっと詳しく紹介します。

17

## 第八章倫理学理論は環境科学に貢献できるか

- この論文では、リスクアセスメントや工業製品の環境負荷の測定、保全生物学などを例にとり、どのような場面で価値について考えなくてはならないかということを考察しています。
- 「環境」が大事だといってもその内容はさまざまであり、しかも、**方向性の違う価値の間でなんらかの量的な比較**を行わなくてはなりません。温暖化ガスの排出は有害化学物質の排出とくらべてどのくらい深刻なのか、対策にかけるコストはどのくらいまでなら適正なのか、など。

18

## 第八章倫理学理論は環境科学に貢献できるか

- 現在の倫理学理論はこういふときに助けになるどころか、まったく異なる理論が対立しあっていて解決の様子もなく、外から見たらどれを使ったらいいかすらよくわからない状態。
- 第四章の「未確定領域功利主義」はそういう外部の人に利用してもらうためのプラットフォームとしての倫理学理論。「直観」で答えが出ない問題については功利主義的に考える。

19

## 第八章倫理学理論は環境科学に貢献できるか

- さまざまな環境負荷を比較する際にも、「最終的にだれをどのくらい不幸にするのか」という観点から考えることで一元的なものさしができる。
- 現在環境科学で実際に使われている仮想評価法やコンジョイント分析は人々の価値観を直接質問の対象とすることで、人々が何をどれくらい大事に思っているか(それがうしなわれることでどのくらい不幸になるか)などを測っているといえる。その意味では功利主義的な発想に近い。
- ただ、功利主義の観点からは、こうした手法が未来世代への影響や情報不足のために誤った判断をしている可能性などをうまくとらえきれないところが気になる。データがとれるものど知りたいもののギャップに気がつけなくてはならないのはどこでも同じだが、ターゲットが非常に見えにくいものであるために特にむずかしい。

20

## 第十章感傷性の倫理学的位置づけ

- 最後の論文は「センチメンタルなのは悪いことか」という話題についての議論のサーベイ。美学領域で始められた議論が倫理学に引き取られた、という珍しいケース。
- さきほども触れたように、倫理学では合理的な議論としての倫理をずっと扱ってきたので、感情に流されるとか感傷によって判断するとかいうのは論外だった。
- 最近はその反動で「感情」の役割を強調する議論が流行。しかし感傷性をめぐるマイナーな議論はその間で忘れられているくらいがある。

21

## 第十章感傷性の倫理学的位置づけ

- 「感傷性」については肯定的な議論も否定的な議論もあるのだが、よく見ると肯定的な議論と否定的な議論ではそもそも想定している感情の種類が違って、まったく立場の相違がない可能性がある。
- 人間をステロタイプ化する効果を持つ安っぽい感情や判断対象と関係のない感情などが倫理的な判断に関わるのはよろしくない、というのは感傷性を擁護する側でも認めている。
- 倫理に感情が関わるのは当然としても、どういった関係方をするか、ということについては合理的な議論が可能。

22

## 倫理学の文化

- タイトルにいう「倫理的な考え方」というのをまとめると：
  - 規範や価値などの問題について、「直観」などのあやしげなものに依拠しつつも、できるだけ合理的な議論をしようとする。論争を収束させようとは思っていない。
  - 倫理とは何か考える上で言葉や概念に注意を集中する。倫理というものを合理的な議論の営みだと捉えていることとも関係
  - 個々の問題の解決よりは、一番基本の原理とか、一番大枠で見た時の解決の方向性とか、そういう大きな話の方に興味がある。

23

## 異文化としての倫理学

- こういう興味を持ち方をし、こういう問題への知見を蓄積している人たちと付き合ったら何が得るものがあるだろうか？
  - 実のところ、解決したい問題がある人にとっては、この意味での倫理学者との交流は驚くほど得るものが少ないのではないかと感じる。
  - ただ、たとえば、自然を見れば我々が何をすべきかが学べる、というタイプのイメージを持っている人は、「我々自身が従うべき倫理」を考える上では絶対それだけではたりない、といったアドバイスは受けられる。
  - どういうものが規範的主張なのか、規範的主張についてできるだけ筋道を通して議論したいときどうしたらいいか、といったアドバイスも得られるかも。(でもそもそもそのアドバイスが欲しい?)

24

## 科学をいかに活用するか？

- これは熊澤さんから出されたもう一つの宿題ですが、この本を読んでも直接の答えはほとんどありません。
- 環境科学を扱う第八章ではそれに近い話題を扱っていますが、ここも「活用」という積極的な関与というよりは研究の方向を考える上で倫理が助けになるかも、くらいの話になっています。

25

## 科学をいかに活用するか？

- その章の議論を拡張するなら、科学の活用という積極的な議論においても、幸福の最大化、という大目標を念頭におくべきだ、とはいえそう。
- ただし、その場合でさえ、たとえば**個々の研究が幸福の最大化にチューニングされることが大目標としての幸福を最大化するとは限らない**。個々の場合について幸福を見積もるわれわれの能力はあまりに限られている。
- 個々の研究は結果を気にせず自由にやらせる、というのは、そうした限界を踏まえたとえで結果を最大にするための知恵なのかもしれない。

26

## 最後に

- 以上、自分の本の紹介をかねて、英米系の哲学的倫理学というものがどういう興味関心を持ってきたか、どういう「文化」を持っているかということを紹介しました。
- 科学の活用にこういう交流がどう役立つのか、むしろ今の話をきいてどう交流できそうだと思うか、ご意見をいただければ幸いです。

27